（抄録）

研究課題名：小学校における新たな遊び場での子どもの遊びの検討：リスク許容モデルを参考にした遊び場開放の試み

研究代表者名：今井 夏子

近年リスクに対する社会的嫌悪感から，子どもの安全に対する懸念が高まっている．Jerebine et al.（2022）は，活動的な遊びを増やすためにはリスクを許容できる環境づくりが必要であることを指摘し，活動的な遊びを促進する方策としてリスク許容モデルを示している．このモデルによれば，物理的環境，学校の方針と規則，仲間との交流，監督の諸点を考慮すれば，リスクを許容できる遊び環境を整備できるはずである．しかしながら，これらを実践的に検討した研究はない．そこで本研究では，リスク許容モデルを参考に小学校で新たな遊び場を開放することによって，どのような子どもたちの遊びが生起するのかを明らかにするとともに，遊び場を開放することで，子どものみならず，教師の意識がどのように変化するのかを明らかにすることを目的とした．

対象は，東京都世田谷区の公立小学校 1 校に在籍する小学 1 年生から 6 年生の 312 名であった． 遊び場の開放は 2022 年 9 月～10 月の中休み（15 分間）と昼休み（15 分間）に実施された． 遊び場の開放に伴う調査項目として，開放した遊び場の観察ならびに教師への半構造化面接を行った．観察は，介入期間のすべての中休み，昼休みに実施された（計 38 回）．本研究では，観察された遊びをすべて記録する事象見本法により，発生した遊びの種類，人数，性のデータを収集した．また，発生した遊びが学校内の他の遊び場でも観察されるものであるのか否かを確認するため，校庭でも同調査を実施した．教師への半構造化面接は，教諭 3 名を対象として，半構造化面接を実施し，遊び場の開放に伴う子どもならびに教員の意識や活動の変化について尋ねた．

本研究の結果，低学年は男女ともに，自然遊びが多く確認された．対して，高学年の男子では「木に登る」「鬼ごっこ」といったからだを使う遊びが，女子では「おしゃべり」「地面に絵を書く」といった静的な遊びが多く観察された．さらに開放した遊び場では 22 種類のリスキープレイが観察され，その割合は遊び全体の 62%であった．一方，校庭では 5 種類のリスキープレイが観察され，遊び全体の 10%であった．さらに教師へのインタビューからは，遊び場を開放することで，子どもが自然と遊ぶ様子や男女で挑戦し，乗り越える姿や遊び場の開放によって，効果を感じている教員もいる一方で，安全面への懸念が強い様子も確認された．

以上のように，本研究ではリスク許容モデルを参考に遊び場を開放する取り組みが学校における子どもたちの主体的な遊びを生起する手立ての一つになり得る可能性を示すことができた．この点は，本研究の成果であると考える．しかしながら，本研究の対象は世田谷区の公立小学校 1 校に限定されており，結果の解釈は慎重であるべきとも考える．そのため，今後は他の調査校において同様の検証を行う必要があると考える．